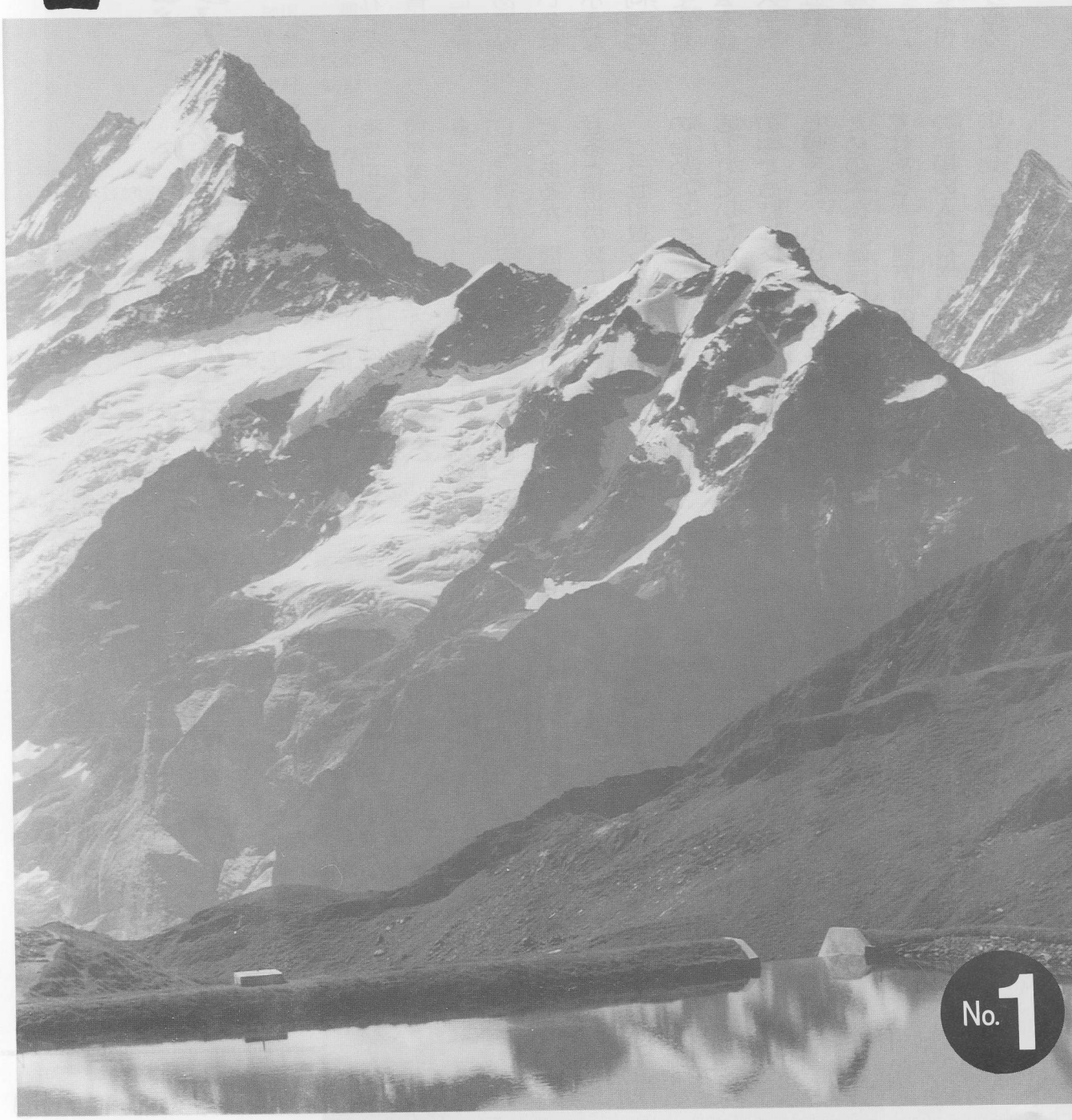
東方学院だより

TOHOGAKUIN NewS

1991



No. 1

FOREWORD

『東方学院だより』発刊にあたって

東方研究会理事長
東方学院長
中村元

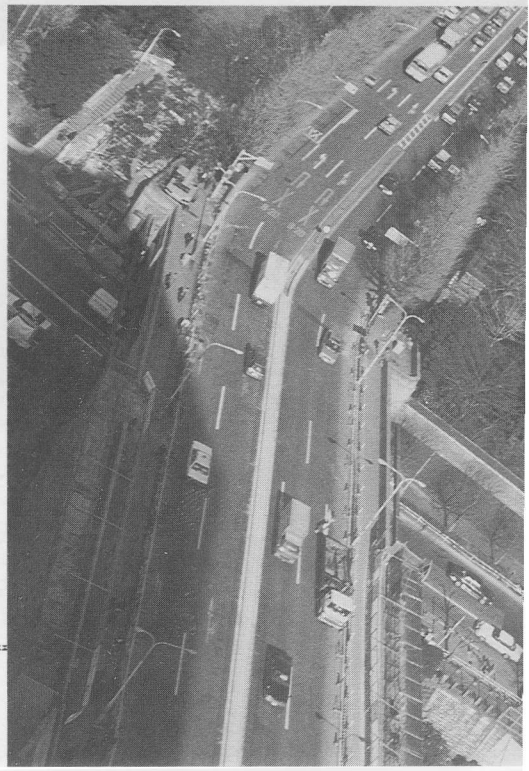
わが国の教育問題が論議されて久しいが、高等教育乃至大学教育については、わたくしは自分なりに意見をもっている。しかし政府のあてがう大学教育の枠にとらわれていては絶望的であると思ったので、小さな範囲でも自分の理想の実現に向って実行に着手しようと志した。その基盤として財団法人・東方研究会を設立し、昭和四十八年春に、東京大学を定年退職するとともに、一般社会に向っての公開講座として「東方学院」を開創した。

この学院は、いかなる免状を下付することもできないし、何の学位を授与することもできないが、真に学問を愛し、道を求める人々が次々と集って参加し、すでに十七年余を閲した。現在研究会員は三百五十人ほどであるが、開創時以来の人々を合せると相当の数に達する。

どうせ引退した世間知らずの学者の始めたことだからいつ潰れるかと思われていたが、おかげさまで東京の中でも特に交通便利な、由緒のある場所に、小さいながら学問研究のための本拠を確保した。資金も僅かではあるが、諸方面の御支援によりわが国の人文科学の諸学会の貧弱なのに比べるとけた違いのものを用意

することができた。まず、諸方面に御迷惑をかけることなしに存続し、活動を発展させることができそうである。殊に関係者の方々が心を合せてなごやかな雰囲気の中で事業を進めてくださるのが、何よりも宝であると思っている。

ただ惜しむらくは、今まで多数の役員、講師、研究員、研究職員、研究会員、通常会員の方々の間の相互連絡が不充分であったし、この点ではわたくしも申訳ないと思っていたが、このたびヴォロンティアとして奉仕的に協力してくださる方々の努力により、「東方学院だより」が刊行されることになった。小さな苗木から大樹の育つことを夢見ている。



御茶の水から湯島聖堂・神田明神を眺む

東方学院だより

TOHOGAKUIN NewS No.1

1991

CONTENTS

FOREWORD
『東方学院だより』発刊にあたって
学院長　中村　元……2

INTERVIEW
学院長に聞く――環境問題について
話し手　中村　元……4

CONGRATULATIONS!
発刊を祝して……7
神田　明
小高　民雄
常磐井鸞猷
中村　敏夫
藤波　哲太
星埜　保夫
前田　専學

LECTURES
講座紹介
関西（山口恵照教室）…松本　清……10
「インド思想と仏教」
「サンスクリットの言語と文化」
東京（中村　元教室）…山本文溪……11
「仏教入門」
「インドの思想と文化」

LECTURER'S MESSAGE
北京雑感　三友量順……12

STUDYING ABROAD
留学生近況―韓国精神文化研究院にて
福士慈稔……14

SOCIAL ACTIVITIES
大手町クラス親睦会
奥田洋子……15

STUDY EXCURSION
報仏寺・西山荘を訪ねて
桜井俊彦……16

INFORMATION
事務局から……17

発行日　1991年1月26日（不定期発行）
発　行　東方研究会事務局
〒101 東京都千代田区外神田2-17-2
☎03-3251-4081㈹　Fax03-3251-4082
郵便振替　東京2-105515
編　集　編集委員会

INTERVIEW

哲学者・仏教学者はとかく社会問題とかけ離れた存在と見られている風潮があるので、時の問題をとりあげて、毎回インタビューをします。

⊙中村元学院長に聞く⊙ 環境問題について

学院長室で気楽に答えられる中村先生

――昨年、先生は環境問題に関する会議にご出席されたとのことですが――

ええ、そうなんです。会議そのものは、三年前、ドイツのニーダーザクセン州の政府が中心となり開かれたもので、(州の)首相が「人類の生存がこのまま続けられるかどうか。すでに南極や北極にはオゾン層の抜けている穴がある。人間の生存にとってこれは大変なことである。自分は自然の問題について諸国の英知を伝えていただいて、新たに考え直そうと思ってこの会議を開こうと思った」という開催趣旨を述べられました。

また、東西の壁が壊れた時に、ちょうど私はドイツにおりまして、森の国と呼ばれている西ドイツの人々は、東ドイツから来る車は排気ガス規制がないために空気が汚れて森が枯れると心配しておりましたね。

その点、日本は恵まれておりますね。島国であるためアジア大陸からの排気ガスがやってこないでしょ。日本古来の自然は『羅生門(らしょうもん)』の映画に代表されるように美しいと思いますよ。だからこの授けられたも

のを大事にしてですね、そしてその自然と共に生きるという気持ちを発展させるということが必要ではないでしょうか。そこにはおのずから和の精神が育まれることになります。

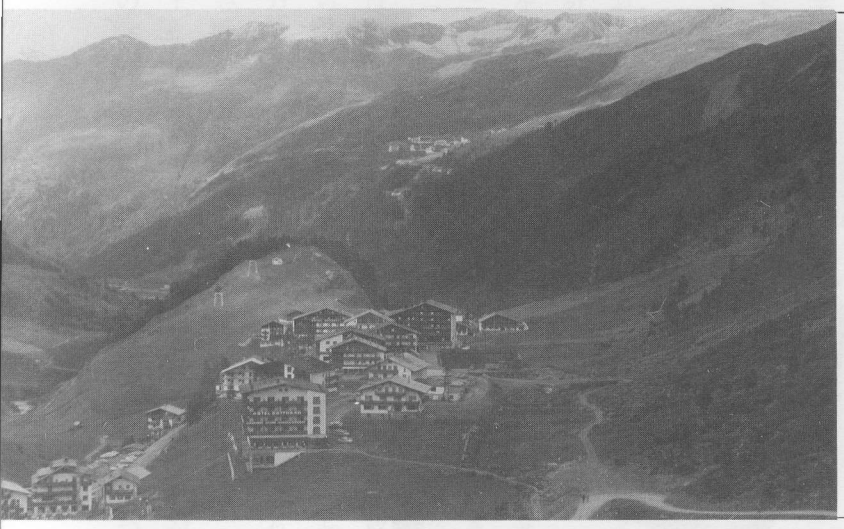
日本は幸か不幸か狭い島国ですが、仲良く暮していくという生活習慣を保持しています。今後、私たちは地球社会の中で生きていくことになりますと、今や地球全体が狭い島国のようになってきたわけです。みな、地球の上に住んでいるのだから、ここで物騒なことはやめましょうよ、けんかはやめましょうよというようなことを、みんなが考えるようになってきますでしょ。そうすると、この日本人の生活体験というものが新たな局面において生かされることになることも考えられると思います。

――そのような日本人の心をどうすれば外国の方に伝えられますでしょうか――

感覚に訴えるものは外国でも認められているわけですが、抽象的思惟に関するものになりますと、なかなか難しいのです。今は日本から直接ではなく、他の国を介して文献から理解されているという段階です。

――では、今、東方学院で外国の方々が直接日本語で学んでいらっしゃるということは嬉しいことですね――

ええ、喜ばしいことです。わかりやすい日本語でね、お話することが必要だと思っています。わかりやすい日本語となれば、日本語は国際性を持つと思います。



自然が美しいチロル地方（オーストリア）

――次に精神面における環境問題についておうかがいしたいのですが――

精神面の環境問題は無視されていますね。みんなの人が疲れないようにするのが必要だと思うのです。『ダンマパダ』に「たとえ貨幣の雨を降らすとも欲望の満足されることはない」とありますように、人の欲は止まることがないのです。ですからあまり無理をして欲することがなければ幸せと思うのです。自分が不満に思うことがあり、それを努力によって改めることは必要です。しかし、またどうにもならないことに対しては、あーそれは因縁のなすところと思って、フッと、思い切って自分の与えられたことに満足するということも必要ではないでしょうか。というように両方の面が必要と思うのです。これらの調和をもって生活するのが必要ではないでしょうか。仏教ではそれを中道と申しますが、日本では古くから和ということで表わしておりました。自分のできることの範囲を見極めて、それ以上に無理な欲望を起こさせないこと

でしょうなー。足るを知ることに十分気がついていないということは、今の人に言えるでしょう。

――これから私たちは、どのように環境問題をとらえていけばよいのでしょうか――

そうですね、古くからの考えに対して、新しく考え直し、自然との調和を保ちながら発展する必要があります。すべての命を損なわないように文明を作るということが、みなさんの協力によってできるのではないかと期待しているのですが…。

――そういう趣旨で東方学院は設立されているわけですね。本日は、貴重な時間を裂いていただきまして、本当にありがとうございました――

＊机の上に飾ってあった菩提樹の鉢植が印象的でした。

（一九九〇年九月二十七日）

あとがき　生まれて初めてのインタビューでもあり、またかねてより尊敬しています中村先生とのインタビューのため、たいへん緊張しました。しかし、お話を進めていくにしたがい、先生のすべてのものを慈しむ姿に直接触れさせていただき、また無尽蔵であられます先生の知識より多くのものを分けていただきました。このような機会を持たせてくださいました中村先生、東方学院の方々、関係者の方々にたいへん感謝しております。

（聞き手、福島洋子＝中村元先生「インド思想史」受講生）

牛のフンを運ぶ女性（インドにて）

CONGRATULATIONS!

（五十音順）

☆

春秋社社長
神田　明

『東方学院だより』刊行によせて

「東方学院」の理想とするところは、真理探求の本来の意義に鑑み、見失われるおそれのある〈人間〉の回復を目指し、学院の理想に賛同する先生がたと、その下に参集する学徒による〈個人指導の場の共同体〉であると伺っています。

中村元先生は謙遜されて「寺小屋」とおっしゃっておられますが、先生の指導方針に基づく、常日頃の学院の活動には、目を見張るものがあり、その理想とするところへ、日々、近づいていると拝察いたします。

かねてより、その活動ぶりについては、もっと多くの人々に知って欲しい、知られてよいと思っておりました。今般、『東方学院だより』が刊行されるとのこと、まさに機を得たことと、心よりお慶びを申し上げます。これを機に、学院が空極の理想の姿に向かって、さらに、なお一層発展されますことを祈ってやみません。

☆

東京書籍取締役社長
小高民雄

知らぬ間に永いあいだ、中村元先生並びに学院関係の諸先生に御指導をいただきながら、今日まで過ごしてまいりました。先生とお会いする都度、私は先生の御人格、底知れぬ学識・見識に只々驚嘆、人間としてあらねばならぬ最高の資質を会得されておられる方と尊敬申し上げております。

世間的にいえば功成り名遂げた先生が、純粋なお気持ちでなお、現代社会のもつ歪み是正のため、あえて「一隅を照らす」の志の下、学院を「個人指導の場の共同体」として真の学問の在り方、理想の教育の原点として、この具現に努力されているエネルギーには衷心より感心いたしております。

この「たより」が少しでもより多くの人に読まれ、共鳴し、増幅し、よりよい人間社会の環境作りにお役に立つことを信じて疑いません。今までの学院の歩みが証明していますから。

☆

真宗高田派法嗣
常磐井　鸞猷

創刊によせて

東方学院が年々内容を充実され、国際的にも重要な文化学術活動を重ねておられますことは慶賀にたえません。このたび学院のPRをかねて「東方学院だより」を創刊されるとのこと、まことに時宜を得たことと心から喜んでおります。東方学院という

すばらしい存在が、まだまだ世界に知られていないのを日頃から残念に思っておりますだけに、ぜひ有効なPRをお願いしたいと存じます。

学院が中村元先生の私塾として、その御学徳に負う所多大であるのは当然のことですが、財政面までも先生に負う所が多いのは甚だ気がかりです。賛助会員も一層の尽力をしなければなりませんが、何とか財界に働きかけて強力な支援体制が得られないものでしょうか。そのためにもこのPR誌が心強い役割を果して下さるよう願っております。

今後は地方での講座も更にその数を増やしていただきたいと存じますし、学院の先生方も、中村先生の学問と共に、その御人徳を継承されますよう願って止まない次第です。

☆

東方研究会常務理事
中村敏夫

元さん

私は中村理事長と昭和五年入学の第一高等学校文科乙類での同級生です。彼の学業は断トツで、しかし秀才ぶった臭みはなく授業をさぼる友人の代返（出欠をとるとき代って返事をする）をしてやるようなところもあって、元さんの愛称で親しまれていた。

私は東大法学部二年生の時、胸を患い六年間の療養生活をしたが、その間元さんは友人の見舞金を集め多忙の中を毎月十円を六年間絶えることなく病院に届けてくれ私の命を助けてくれた。今日生きているのはそのお蔭です。

元さんは、一高入学の、その年の弁論部の大会で「マハトマ・ガンジーについて」論ぜられ、幼稚な私は驚嘆したもので、このころから元さんの印度への志向、仏教へのおもいは定まっていたのではないかと察せられる。元さんが東大の印度哲学科に入学した時、私ども仲間は元さんなら公務員になれば局長、会社員なら部長に間違いなくなれるのに宗門の出身でないのに惜しいことだと話合った。

☆

受講生
藤波哲太

十年の回顧

戦後三十年におよぶ会社づとめをやめる前年（昭和五十六年）たまたま朝日新聞で、鎌田茂雄先生の仏教学入門（「八宗綱要」を読む）の講座（連読二十回）を知り、かねがね人生しめくくりの心構えを得たいと（当時すでに水彩画の稽古を始めて五年になっておりました）考えておりましたので何のためらいもなく、これに参加しました。このときいつも隣の席に居られた赤沼さんからもっと徹底して仏教教理学を学びたいなら、中村元先生の塾があると知らされ、翌年（昭和五十七年）から東方学院に入れて頂いた次第でした。

その頃の学院の本部は神田明神社の崖下にあった小さな古いビルの中であり、そこで三友先生の「法華経」の講座をうけ、中村先生は現在の大手町ビル四階の教室で、仏教入門として「スッタニパータ」を二時限目は「印度の思想と文化」でした。そしてその歳の夏には学院の先輩山本文溪さん、

金田さん方とスリランカへ仏跡見学の旅をしました。

以来約十年いろいろの講座をうけ、また各地の旅行に参加できました。お蔭様で東大（工学部）、海軍そして会社（日航）では到底めぐり会えなかった多くの心の友を得ることが出来「不断煩悩得涅槃」の境地に少しでも近づくべく勉学中であります。

中村先生にはこれからも御健康に留意され私達がいつまでも先生の謦咳に接することができますよう、そしてこの輝しい仏教の塾を次の時代への最大の遺りものとされますよう、お願いしたく思っております。

☆

東方研究会理事
星埜保夫

『東方学院だより』の発刊によせて

中村元先生は、東方学院のことを卑下して「寺小屋」とよく言われるが、私は、それは良い意味で当っていると思う。東方学院は、昔の寺小屋の良いところだけを集めている。

中村先生は、「研究団体は先ず共同体的な精神的な雰囲気の中から自然に出発するものでなければならない」と言われ、それを東方学院で実践された。いま、東方学院に集まって来ておられる講師、研究員、受講者の方々の間に自然に醸成された「学風」ともいうべき雰囲気は、まさにそれであろう。

今度発刊される『東方学院だより』によって、その学風が一層深められることを期待する。

☆

東京大学教授
前田専學

『発刊によせて』

東方学院が、中村元学院長の熱望によって東方研究会を母胎として設立されたのは十七年前の昭和四十八年四月のことである。それ以来学院は、数あるカルチャーセンターとは本質を異にする、きわめてユニークな「個人指導の場の共同体」として、近代機械文明のなかに見失われがちな〈人間の回復〉を目指して独自の発展を遂げ、いまや東京のみならず、関西にも、名古屋にも、香川にも、金沢にも、その共鳴者を中心にして、教室が開設されている。これはひとえに中村学院長のご仁徳のしからしめるところであろう。

このたび、『東方学院だより』が、研究会員の連絡誌として、はたまた学院のPR誌として発刊されることになったとのこと、これは学院のさらなる発展のために、ひいては日本の精神文化の発展のために、まことに慶ばしい限りである。心からの声援をおくり、その成長を祈りたいと思う。

※写真は到着分のみ掲載させていただきました。

講座紹介

関西

山口恵照先生

●インド思想と仏教
●サンスクリットの言語と文化

まさに寺小屋らしい山口教室

昭和五十九年関西教室の開設以来、山口先生は「インド思想と仏教」を一貫した趣旨のもとに講ぜられております。ヴェーダ、ウパニシャッドから大乗仏教まで、年々にその主とする内容は変りますが、全体の関連に於て取上げられるそれぞれのテーマは、いつも受講生に新しい発見を与えて下さっています。また、六十一年度より始った「サンスクリットの言語と文化」の講座は、今迄に『サーンキャ・カーリカー』を終え、引続いて『唯識三十頌』を読んでいただいていますが、また折々に「ウパニシャッド」や『般若心経』等々を取り上げられ、単に言語としてのみではなく、「思想と文化」として見るサンスクリットの意義を説く魅力ある講義を続けられています。

御高齢の先生には連続三時間の講義をいつも意欲的に続けられ、また時々は我々の講義後の懇談にも加わって下さり、初歩的な質問にも懇切にお答え下さって、誠に家庭的な雰囲気の山口教室です。

（松本　清）

東京

中村　元先生

●仏教入門
●インドの思想と文化

ユーモアあふれる講義の中村教室

学院長・中村元先生の講座は、表記のとおり二講座ある。前半は夕方五時から、途中休憩を入れ後半は七時より八時までである。前後ともに受講する人が多い。前半だけ、もしくは後半のみの人もいる。大手町ビル四階の教室は一杯で、近年は中国・韓国・ネパール・ドイツからの受講者がおられ、常時六十名は受講されている。

授業で使用するテキストはその時に応じて変わるが「試験もなく、文部省で定められた単位もないので、皆さんと相談して講義の内容をきめていきたい」と先生は言われる。最近の内容は、前半の「仏教入門」では、エンサイクロペディア・ブリタニカの日本語版の中より、先生の書かれた「仏教」という項目を用いている。仏教の歴史、教義、日本の仏教、そして諸外国の仏教と大変巾広く扱っている。

後半の「インドの思想と文化」は、これも先生の著述による『インド思想史』（岩波書店）を用いている。時間的に勤め帰りのサラリーマンも多くなり、前半よりは少し難しい内容となる。

しかし両講座とも、含蓄に富む話、そして時にはジェスチャーたっぷりのユーモアある話には、教室内は爆笑の渦となり、しばし授業を忘れさせることさえある。また時には、痛烈な批判も飛び出すが、この時も笑いが出るのは不思議だ。

この様に変化に富んだ講義は、先生をしてその研究の深さを知らされる。また、先生の言われる「親しみある仏陀像」もより身近なものになってくる。

この数年に扱ったテキストには、「大智度論」「義足経」「中論」「那先比丘経」「遊行経」「ヒンドゥー教史」「スッタニパータ」放送大学でのテキスト「仏典」等があげられる。

（山本　文溪）

宣化の街（筆者撮影）

LECTURER'S MESSAGE

北京雑感

三友量順
（東方学院講師）

七月の末から八月にかけて一週間ほど中国北京に滞在した。今回の訪問目的は日持上人終焉の地と目される、北京西北部宣化（制限解放地域に指定されている）の古寺を訪ねることであった。私の初めての中国訪問は一九八〇年に遡る。中村元博士と北京大学の季羨林博士との直接の学術・文化交流が始まったその年である。その後、五度ほど北京を訪問した。北京空港に着くと、季博士の秘書・李玉潔女史と東方学院からの派遣留学生・辛島氏とが出迎えてくれた。北京大学は市の北部に位置する。大学のある海淀区までは空港から車で約一時間の距離である。北京大学は二年前の一九八八年に建校九十周年を迎えた。大学は全寮制であるが、夏期休暇中のために構内は静かな佇まいを呈していた。学生数は一万に達し教師も二千八百人以上という。諸外国からの留学生も多い。現在の大学の様子は『建校九十周年記念』の出版物に写真とともに詳しく載っている。

訪問時はちょうど夏日制（四月～九月）の期間であったために日本との時差はない。午後七時になっても外は明るく、構内のベンチでは人々が読書をしている。市内は亞運（アジア大会）の掲示がいたるところに見られた。大学の構内には未名湖という大きな湖がある。西門は昔ながらの古風な構えで、どことなく東大

の赤門を思わせる。私の宿泊したゲストハウス勺園の近くにも蓮池があって大陸的な大きな蓮の華が美しい。また構内には伝統的な中国様式の建物が多い。未名湖の西にはコンピューターセンター（北京大学・恵普計算中心）がある。この古風な建物の周囲には電柱も電線も見当たらない。地下に電線を引いている。こうしたところに景観を損ねない心遣いがある。勺園の近くにはセルヴァンテスの銅像が建っている。湖の南岸の丘にはエドガー・スノーの墓碑もある。湖の南西の高台には鐘楼がある。鐘（大清国内申＝一八三六年の銘がある）の周囲には方位を指し示すために易学で用いる卦が描かれている。これは宣化城内にあった大きな鐘楼の鐘の周囲にもみられた。大学の南門の周囲には電脳（コンピューターやワープロ）を扱う店舗が数多くできていた。これも新しい北京の変化である。

宣化に行くまでの二日ほどの自由時間は、構内散策以外にも現代中国の日常生活を細かに観察させてくれた。王府井までの小型バス料金は三・五元である。天安門の広場を過ぎるとほどなく王府井の通りに至る。昭和十一年にここの東安市場で日持上人の遺物が偶然見つかった。通りに面しては現代的な建物が軒を連ねている。人々の活気と市場の賑やかさには昨年の天安門事件を思い起こさせるなにものもない。宣化に同行してくれた愈君（北京大学東方語言系在学）から寮生活の様子を聞くことができた。それによると、大学の寮生でも最近は月に百元（日本円で二千七百円ほど）の経費がかかるという。その内の六十元が食費で、残りで書籍や生活に必要なものを購入するということであった。大学からは一名の学生にたいして十七元の補助がでる。それではとても足りず、父兄からの援助が必要となる。彼の父は浙江省で農業を営んでいるという。因みに社会人の月収が約二百元前後である。大学の教員の給与も一級教授で三百元、一般教授で二百三十元、助教授で百七十元、講師で百三十元という。大学には学生食堂が七箇所ある。回族のための「清真食堂」も別にある。彼が入学をした八十六年には食費は二十～三十元でよかったという。食費の支出増加で学生たちも最近の物価の上昇を身にしみて感じているようである。学生寮は六人部屋で院生になると四人部屋となる。入学試験には統一共通試験が行われる。そして省ごとに合格者が上位順に決定される。例えば愈君の故郷の浙江省では二百名が入学できる。全土から北京大学に入学している。試験科目は文化系で六科目、理科系では七科目となる。一般の学科では四年制であるが、西方文学学部のスペイン語科と東方語言系の日本語科は五年制とのことである。

北京に滞在中、季博士のお宅へ早朝二度ほど伺った。北門の近くにある四階建ての宿舎の一階に家族の居室と博士の書斎や研究室があった。書斎に隙間なくしかも整然と納まっている書物は博士のお人柄を感じさせた。久し振りの博士との面会は懐かしく楽しいものであった。日持上人の遺物に関する貴重な意見もうかがうことができた。途中で大きなペルシャ猫が顔をみせた。外国生活の経験豊かな季博士の生活の一端をうかがうことが出来るようであった。子猫に指を引っ掻かれた傷も微笑みながら話してくれた。短い滞在であったが、宣化の解放軍の基地内にある古寺の調査も含めて得難い体験ができた。

（滞在中のノートは『日蓮宗新聞』（十月十日・十一月十日号）に寄稿してあります。）

STUDYING ABROAD

◆留学生近況

韓国精神文化研究院にて

福士慈稔
（東方研究会専任研究員）

右、金知見先生

東方研究会アジア諸国派遣研究員として採用していただき、今、韓国で「三国仏教文化交渉史」というテーマのもと、韓国精神文化研究院で研究中です。この研究院は、韓国人文科学系の国立の研究所で、図書館は韓国有数の蔵書を誇り、又、付属の大学院はソウル大学の大学院に合格するより難しく、韓国各地から優秀な学生が集まってきています。大学院の学生は基本的に全寮制（結婚及び就業年数、修士二年・博士三年を過ぎると寮を出なければならない）で、入学金・授業料・寮費・食費等全て無料、又、全員、在学期間中には費用全て研究院もちの海外研修の制度があり、成績優秀者には奨学金及び海外留学の制度もあります。特筆すべきは、この研究院の助教（日本の助手のようなものですが修士を修了すればできます）を五年すれば徴兵が免除になるということです。まさに韓国の未来を担うべき若者がここに集まってきているのです。

ソウルの中心街から車で約一時間、四方山に囲まれた広大な土地に、巨大な韓国風の建物が立ち並び、喧騒のソウルに比するとここはまるで別世界、研究者にとっては信じ難い楽園です。中村元学院長先生・金知見先生をはじめとする諸先生のお陰を以て、この研究院に最初の日本人研究員として破格の条件で採用され、光栄に思うとともに若干の戸惑いを感じています。

金知見先生の研究室の中央には、中村先生のお写真が飾られています。金先生は何かある度に手を合わせ中村先生に報告し、嫌なことがあっても写真を見ることによって慰められるとのこと。来年還暦を迎えられるとのことですが、よく徹夜で研究することもあるそうで、金先生には学問だけではなく色々な面で指導を受けています。十一月三日には帰国する予定ですが、この研究院での生活は私の一生の宝になることと思います。このような機会を与えて下さり有難うございました。

（一九九〇年九月記）

SOCIAL ACTIVITIES

大手町クラス（中村教室）親睦会

新学期が始まって間もない十月八日、中村元先生のクラスの親睦会が、教室のある大手町ビルから通りを隔てたサンケイ会館で開かれました。当日はあいにくと、秋雨の降る肌寒い日となりましたが、事務局の方の心配をよそに、四十名以上の方々が出席され、賑やかな会となりました。

昨年の四月に初めてこのクラスに入れて戴き、中村先生のようなインド哲学の権威に、素人にも分かりやすくインドの思想や文化についてお話して戴ける面白さに魅せられてしまいました。加えて、訪日中の海外の一流の学者の方々のお話も何回か通訳付きで伺わせて頂きました。しかしその一方で、昨年一年間はほかの受講生の方々と交流する機会が余りなかったのを残念に思いました。そのことを、四月の新春会で知り合った方に申し上げましたところ、それを聞いた受講生のおひとりが、早速この親睦会を開いて下さいました。

この会が受講生主催ということなので、最初に受講生を代表して藤波さんから開会のあいさつがありました。つづいて中村先生からお言葉をいただいたあと、「一番遠くからいらっしゃっている」ネパールご出身のスレンドラ・サキャさんが流暢な日本語で乾杯の音頭を取られました。しばらくの歓談の後、事務局の保坂さん、常磐井さんからのお知らせがあり、その後全員の自己紹介がありました。

立食パーティの良いところはやはり、（ご馳走をのせた皿とグラスをどこかに置き忘れないようにしながら）、適当に場所を移動して、より多くの方々と直接お話し出来ることだと思います。特に大手町クラスの受講者の方々は、場所柄を反映してか、色々な職業の方がおられます。

今回も既に存じ上げている方々とは親交を深め、お顔しか存じ上げない方々にはこのクラスに入られたいきさつなどを伺わせて戴き、印象に残る時間を過ごさせて戴きました。

今回の親睦会を企画、開催して下さりました方々に、心からお礼申し上げます。

（受講生、奥田　洋子）

台風が東京を直撃して、暴風雨の中で開かれたパーティ。五年間クラスのお世話をした保坂俊司事務局主事（研究員）とその後を引き継ぐ高橋堯英事務員（研究員）の慰労と感謝の意味も含めて開かれた。

STUDY EXCURSION

報仏寺・西山荘を訪ねて

「先生、今度は西山荘へ行きましょう」と申し上げたのはいつの日のことだったろうか。閑静なたたずまいで、『大日本史』を著わされたという水戸黄門さまの隠居地だから、東方学院のバスハイキングにふさわしいと思って提案したのでした。

日にちも決まり計画が具体化した頃、先生から「茨城へ行くならば、真宗のお寺がたくさんありますね…」というリクエストが出されました。さて、寺はありすぎるほどたくさんあるが、どこに的を絞れば東方学院らしい旅行になるだろうか。

数日後、『歎異抄』にふれる機会があり、ある話を思い出しました。

――西田幾多郎は、鎌倉で、空襲で焼ける東京・横浜の空を眺めて「世の中の本という本がみな焼けても『歎異抄』と『臨済録』が残れば我慢もできよう」とつぶやいたという。――

宗教の観念化を嘆いた『歎異抄』は、一宗派だけの問題ではなく、宗教全般に潜む共通の問題点をついている、と言えるのではないでしょうか。視点をもっと高い次元において見れば、これほどふさわしい場所はありません。なぜならば、中村先生は授業の中でよく「私は学者ですから…」と、宗教を扱う上で、学問（観念）の立場と信仰の立場を混同しないよう親切にご注意くださるからです。

十一月十七日(土)朝十一時、水戸市郊外の報仏寺に一行三十六名は降り立ちました。中村先生は「原始真宗教団は多分このような草庵をよりどころとしていたのでしょうね」と、開基唯円（親鸞の弟子）の往時を偲ばれておられました。

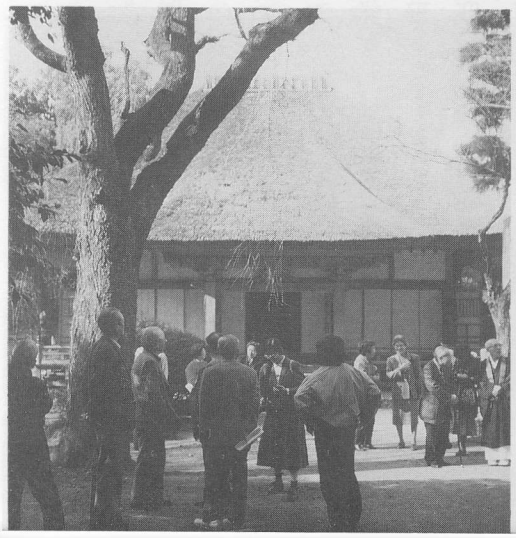
水戸と言えば納豆。昼食は日本三名園の一つ偕楽園で「納豆料理」を賞味。

昼食後、水戸から北二十キロのところにある常陸太田市へ。徳川光圀が晩年の十年間住んだ西山荘は、質素な山荘で、庶民に親しまれたことがうかがえます。

後日、中村先生は、授業の中で「西山荘で『大日本史』が作られたといわれていますが、あのような不便な所で…と疑問に思っておりました。調べてみましたら、後楽園にある公園は水戸藩の屋敷の庭園でございますね。私は、資料がたくさんそろう江戸の屋敷に学者たちを集めて『大日本史』の編纂をさせたと思います。西山荘では、できあがったものに目を通した程度でしょう」と。

ただの観光旅行ではなく、立派な移動教室になるところが東方学院たるところでした。

（桜井俊彦）



→西山荘　←報仏寺

INFORMATION 事務局から

■**東方研究会・東方学院来訪者**

中村学院長のもとへは、世界各国から多くの学者・研究者が訪れました。代表的な方々をご紹介いたします。

《5月》　インド・デリー大学仏教学部長、サンガセーナ・シン博士

《6月》　アメリカ・ニューメキシコ大学教授、アーチィ・ベーム博士

《10月》　ドイツ・ゲッチンゲン大学教授、ハインツ・ベッヘルト博士

以上の先生方は、大手町の中村先生の授業においてご講演くださいました。

■**東方学院夏期講座**

第三回東方学院夏期講座が、八月二十日から二十二日までの三日間、大手町の在家仏教協会の協賛を頂き開催されました。プログラムは左記のとおりです。

○上村勝彦講師・インドの神話

○田上太秀講師・大乗経典における女性

○宮元啓一講師・インドにおける出家と社会生活

○原田　覚講師・古代チベット仏教史

○金　漢益講師・現代韓国仏教と朝鮮仏教

■**東方学院講師の出版物**

中村元先生　中村元選集

『ヴェーダの思想』

『ウパニシャッドの思想』

『思想の自由・ジャイナ教』

以上春秋社

『聖徳太子』　東京書籍

『仏教の心を語る』東京書籍

阿部慈園先生

『あなただけの般若心経』小学館

■**学院長近況**

中村先生は大変ご健康にて、活躍されております。十一月十二日～十四日に行なわれた即位の礼にもご参列になりました。

また、十一月二十八日から十二月九日までは、スイス・スペイン・ポルトガルに視察旅行に行かれました。特に、スイスでは、ジュネーブ大学主催の「東西神秘主義思想と合理主義」に関する国際学会において発表されました。

☆**この会報は賛助会費によって発行されております。**

■**賛助会員募集**

財団法人東方研究会は、昭和四十五年に文部省より財団法人設立の許可を受けて以来、中村先生を中心に「東洋思想の研究およびその成果の普及」に努めて参りました。お陰様を持ちまして、当研究所の諸活動も順調に発展することができました。特に、研究成果の普及を目的に併設されております東方学院は、生涯教育のパイオニアとしての存在が広く知られるまでに発展して参りました。これもひとえに皆様のご協力のおかげと存じております。

しかしながら、当研究所をなお一層継続的に維持発展させて頂くためには、皆様のご理解とご協力を必要といたします。どうか更なるご協力を賜りますようお願いいたします。

なお、東方研究会は賛助会員によって支えられております。賛助会員によるご寄付は、税申告のおり損金扱いとなり税が控除されます。

◇**年額一口　一万円**　口数随意

◆郵便振替　東京二一一〇五五一五

◆住友信託銀行東京営業部

普通　五六二九七九

◆富士銀行本店

当座　一五〇六四

◆三井信託銀行本店

普通　三六二〇〇四九

加入者名はいずれも「財団法人東方研究会」です。

◇**東方研究会賛助会員**◇　（敬称略）

＊＝東方学院講師

阿部　耕雲殿　興徳寺住職　大宮市

阿部　慈園殿＊駒沢女子短大講師　鎌倉市

芦辺　鎌禅殿　耕雲寺住職　東京都

新井　慧誉殿　二松学舎大学教授　東京都

井上　信一殿　宮崎銀行相談役　東京都

一日　正人殿　清水寺住職　長崎市

入江孝一郎殿　日本移動教室協会理事長　千葉県

宇佐見鉄雄殿　岐阜銀行会長　岐阜市

内田　朝雄殿　俳優　東京都

小高　民雄殿　東京書籍㈱社長　東京都

大谷　暢順殿　東山浄園理事長　京都市

大橋　覚阿殿　打越寺住職　徳島県

大倉精神文化研究所　横浜市

㈶偕成会（会長　遠山一行殿）　東京都

小山田統恵殿　アジア平和婦人連合東京都

鏡島　元隆殿　駒沢大学総長　静岡県

勝又　俊教殿　前大正大学学長　千葉市
川崎　繁殿　東京都
岐阜銀行（会長　宇佐見鉄雄殿）岐阜市
久保　継成殿　霊友会会長　東京都
黒川　文子殿　昭和音大講師　東京都
桑田　光雄殿　黎明教会　京都市
小林　慶子殿　東京都
栗原　英二殿　㈶モラロジー研究所主任研究員　千葉県
黒田　大圓殿　成寿山善光寺住職　横浜市
三枝　充悳殿　＊筑波大学名誉教授　東京都
桜井　俊彦殿　㈱真々園　東京都
定方　晟殿　東海大学教授　神奈川県
佐藤　良純殿　大正大学教授　東京都
下田　弘殿　＊武蔵工大名誉教授　鎌倉市
春秋社（社長　神田明殿）　東京都
浄閑寺（住職　戸松学童殿）　東京都
末木　剛博殿　東洋大学教授　八王子市
住友信託銀行　東京都
浅草寺　東京都
鷲見　弘明殿　日泰寺山主　名古屋市
大東出版社（社長　岩野文世殿）東京都
高木　宗監殿　臨済宗吉祥寺前住　群馬県
田上　太秀殿　＊駒沢大学教授　東京都
高橋　審也殿　中央大学教授　前橋市
田名ともゑ　アメリカ
田中　香浦殿　国柱会総裁　東京都
田村　晃祐殿　＊東洋大学教授　茨城県
寺川　文夫殿　前草工銀行常務取締役　東京都
中央学術研究所　東京都
㈱東京書籍（社長　小高民雄殿）東京都
㈱東方界　大阪市
道心会　長野市
東京本願寺　東京都
㈶東洋哲学研究所　八王子市
高梨　孝藤殿　高藤酒造社長　千葉県
常磐井鸞猷殿　真宗高田派専修寺副住職　津市
徳江　東殿　東京都
堤　祐祥殿　延命寺　長崎市
中田　直道殿　＊鶴見大学短大教授　横浜市
中村　市郎殿　黎明教会主幹　京都市
中村しま子殿　東京都
中村　敏夫殿　弁護士　東京都
中村　元殿　東方学院長　東京都
奈良　康明殿　＊駒沢大学教授　東京都
成田山新勝寺　千葉県
新潟県曹洞宗青年会有志　新潟県
西　勝殿　明治学院大学教授　埼玉県
西嶋　和夫殿　＊井田両国堂顧問　東京都
日本交通観光㈱　東京都
㈳日本能率協会　東京都
㈶日本仏教鑽仰会　東京都
早島　鏡正殿　東京大学名誉教授　横浜市
原口　徳正殿　増上寺前執事長　東京都
日隅　威徳殿　日本共産党宗教委員　横浜市
深井アキ子殿　長野県
藤井　教雄殿　身延山久遠寺総務　石川県
藤田　宏達殿　北海道大学教授　札幌市
藤島　秀孝殿　浄安寺住職　長崎市
藤巻　勝殿　山梨県
伏見　清蔵殿　前三菱商事支店長　東京都
㈶法華会　東京都
㈱法華クラブ　東京都
摩尼　清之殿　大倉山幼稚園長　横浜市
正木　春彦殿　長崎大学教授　長崎市
水野　善朝殿　浄土宗往生寺住職　長野市
望月　一憲殿　元東京医科歯科大学教授　東京都
三友　量順殿　＊立正大学短期大学部教授　静岡県
茂手木星歌殿　東京都
山崎　良順殿　ラオス寺院主管　長野県
吉田　魚彦殿　徳清寺住職　香川県
由布　晴子殿　福岡市
若林　隆光殿　二松学舎大学教授　東京都
和田　敏文殿　東京都

♣編集委員会から

第一回編集委員会が開かれたのは、昨年七月。僧侶・税理士・主婦・OL・会社役員と老若男女多彩な顔ぶれに、事務局から主事の保坂俊司さんに加わっていただき、九人の構成で出帆しました。

東方研究会の賛助会費によって発行されていますので、発行は事務局ですが、編集委員会は、東方学院の受講生で構成されています。そして、発案も受講生から出されたものです。事務局と受講生（研究会員）が一体になって進んでいます。「関係者の方々が心を合わせてなごやかな雰囲気の中で…」（P3）という学院長の「協同の精神」にも添っているといえるでしょう。

予定では、昨年中に発行する計画でしたが、創刊号ということで慎重に細心の注意を払いながら進めましたので、遅れてしまいました。

今後は、年四回の発行を予定していますが、賛助会費の協力具合いと製作サイド（奉仕活動なので）の様子を見て軌道に乗るまでは、年二・三回の発行になると思いますので、とりあえず不定期発行とさせていただきます。

次号には「学院のひろば」として、意見交換、自由投稿のページを予定していますので、お気軽に事務局あてに原稿をお送りください。本誌のご感想・ご要望も寄せて頂けると嬉しいのですが…。

（S）

東方学院 一九九一年度講義日程表

曜日	講師	講義題目	時間	地区
月	三友量順	法華経入門	14:00～15:30	東京
	三友量順	サンスクリット語入門	15:30～17:00	
	阿部慈園	パーリ語初級	16:00～17:30	
	阿部慈園	仏教梵語原典研究	19:00～20:30	
	上村勝彦	サンスクリット語中級	18:00～19:30	
	中村　元	仏教入門	17:00～18:10	
	中村　元	インドの思想と文化	18:30～19:30	
	三枝充悳	宗教学概論	16:40～17:50	
	山口恵照	インドの思想・大乗仏教と日本仏教	17:30～19:00	関西
	山口　務	法句経入門	19:00～20:30	
	山口・西尾	サンスクリットの言語と文化	19:00～20:30	
火	原田　覚	ラマ経の文化と歴史	10:30～12:00	東京
	山口瑞鳳	チベット語文法	13:30～14:45	
	山口瑞鳳	中級チベット語講読	14:55～16:10	
	田村晃祐	最澄	14:00～15:00	
	田村晃祐	日本仏教史・親鸞	15:00～16:00	
	川崎信定	チベット語仏典講読	16:30～18:00	
	石川　響	日本画	13:30～16:30	
	西尾秀生	ヒンドゥー教入門	18:00～19:30	関西
	橋本哲夫	パーリ語・パーリ文化	18:30～20:00	
水	中田直道	仏典にみられる医術	19:00～21:00	東京
	苅谷定彦	法華経の世界	18:30～20:00	関西
	北川清仁	インド近代思想	19:00～20:30	
木	津田真一	華厳経の探究	13:00～15:00	東京
	津田真一	大乗仏教思想論	15:00～17:00	
	奥住　毅	唯識説	17:30～19:30	
	C.K.バクシ	ヒンディー語入門	18:00～19:30	名古屋
金	西嶋和夫	Lecture on "Shōbōgenzō"	13:30～15:30	東京
	西嶋和夫	『正法眼蔵』講読	15:30～17:30	
	田上太秀	『大乗涅槃経』講読	17:00～18:30(隔週)	
	斎藤　敬	英文仏教文献講読	17:00～19:30	
	金　漢益	韓国の言語と文化	17:30～19:00	
	中根専正	参禅会	毎月第3金曜18:30～19:30	
	松本照敬	インド哲学原典講読	13:10～15:00	
	西岡祖秀	チベットの言語と文化	17:00～18:30	関西
	日野紹運	ヴェーダーンタ哲学入門	13:00～14:30	名古屋
	日野紹運	ヒンドゥー教入門	14:30～16:00	
	日野紹運	サンスクリット語初級	16:00～17:30	
土	松本照敬	インド思想史	8:30～10:00	成田山仏教研究所
	松本照敬	サンスクリット語初級	10:30～12:00	
	菅野博史	中国における法華経の思想	15:00～18:00	東京
	西村公朝	仏像彫刻の実技基礎	毎月第2土曜日 13:00～19:00	
	西山多寿子	仏像彫刻の実技		
	島田外志夫	インド音楽の理論	15:00～17:00	
	吉野恵子	中国仏教	16:30～18:30	
	上村勝彦	サンスクリット語初級	16:00～17:30	
	上村勝彦	サンスクリット語上級	18:00～19:30	
	田辺和子	仏教文学	14:00～16:00	名古屋

E A R T H

氏夫保埜星：影撮――りよトルワルデンリグ・スイス――(m4724)ンルホルーアータスンィフと(m8704)ンルホクッレュシ

(km万0694億1らか陽太)